

吉良城跡 II

1986.3

高知県吾川郡春野町教育委員会

吉 良 城 跡 Ⅱ

1986.3

高知県吾川郡春野町教育委員会

序

この度の発掘調査は、昨年度に引き続き春野町教育委員会が調査主体となり、国・県の補助を受けて、特に吉良屋敷跡と伝えられる場所の史跡保存について適切な資料を得るために実施したものである。

もともと吉良氏は源希義の子孫とも伝えられている。鎌倉時代後期になると、この春野地方には木津賀氏、小島氏、森山氏等かずかずの国人が成長するが、中でも吉良氏は5千貫を領する土佐7守護人に數えられるほどの勢力となった。しかし永正元年（1504）から大永7年（1527）頃にかけては、西方の一条氏、北方の本山氏におびやかされながらも、かの名声高い吉良宣経、その子宣直と城主はうつる。その後、吉良城主に本山氏がうつてかわるが、その支配もわずか20年、長宗我部親貞が吉良氏を名乗ることとなる。

この2つの系統の吉良氏が同じ場所に屋敷をもったかどうかは勿論わからないが、それらの解明をも含め、残存する石垣が当時のものであるか、また往時の遺構はどうなのか、更に歴史を探るに充分な遺物が出るのかどうかということが調査の目的であり大きな期待であった。

地形その他から推考される屋敷跡は、今回調査地の奥上段と目されたが、そこは現在立派に生育した柿園であり、発掘には無理があるので下段南の竹の多い旧畠地とした。地権者は石田昭二郎氏、石田正俊氏であり、発掘の趣旨を深くご理解いただき、無理なく調査が実施できたのも、その方々の心よいご承諾のたまものである。

詳細な調査結果は専門家の皆様によりこの報告書にまとめていただいたが、春野町教育委員会としては早くからこの吉良城跡が町の重要な史跡であることから、昭和35年に町指定とし、将来史跡公園としての整備を進めたいところであるので、昨年に続く今回の調査に基づき、今後の調査への大きな望みを期して、できれば当初目ざした5ヵ年計画を順調に進めたく念願するものである。そのためにも、今後とも国・県の温かいご指導、ご援助を切にお願いする次第である。

おわりに、このたびの調査対象地の地権者である石田氏ご両人に対し深甚の謝意を表しますとともに、発掘調査全般にわたり終始適切なご助言とご指導をまわりました岡本健児先生、宅間一之先生、並びに高知県文化振興課の皆様方に深く感謝とお礼を申し上げ序といたします。

春野町教育長 川 窪 芳 喜

例　　言

1. 本書は、春野町教育委員会が国・県の補助を受けて昭和60年度に実施した吉良城跡発掘調査の概要報告である。
2. 調査は、春野町教育委員会が主体となり、高知県教育委員会の協力を得て実施した。なお、調査は、高知女子大学岡本健児教授、佐川高等学校定時制宅間一之教頭の御指導をうけ、高知県教育委員会文化振興課主事山本哲也、主事廣田佳久が担当した。
3. 報告書で使用した図面のうち、第1図は、国土地理院発行の国土基本図5千分の1(IV-1D-19)を複製使用し、方位は方眼北(G・N)とした。また、第2図は、「高知県春野町中世の城跡」から転用したものであり、方位、縮尺は記入されていなかったため、本書では、明記できなかった。
4. 本書の執筆は、Ⅱを山本哲也が、他を廣田佳久が担当した。なお、作成にあたっては、顧問の先生方の御指導を受け、近世陶磁器の整理については松田直則(高知県教育委員会文化振興課主事)氏の協力を得た。
5. 報告書で使用した遺構の略号は、SK(土壤)、SD(溝状遺構)、P(ピット)であり、出土遺物に付した番号は、実測図の番号と一致している。
6. 周辺の地形測量にあたっては、春野町産業経済課同和対策室の協力を得た。
7. 調査及び整理を通じ協力を得た多くの方々については記して感謝するものである。

(発掘調査体制)

団長　川 瘦 芳 喜(春野町教育長)
副団長　池 上 孝 雄(春野町社会教育課長)
主任調査員　廣 田 佳 久(高知県教育委員会文化振興課主事)
調査員　山 本 哲 也()
顧問　岡 本 健 児(高知女子大学教授)
宅間 一 之(佐川高等学校定時制教頭)
総務　井 上 崇(春野町社会教育係長)
春野町文化財保護審議会　揚 田 武 実(春野町文化財保護審議会委員長)
*　西 村 四 良(春野町文化財友の会会長)
*　山 藤 正 寛(春野町文化財専門員)

本 文 目 次

序

例 言

I 調査にいたる経緯	1
II 土居と土居周辺の概要	1
III 調査の方法と経過	6
IV 調査の概要	6
1 調査の内容	6
(1) 層 序	6
(2) 各トレンチの概要	7
2 検出遺構	16
3 出土遺物	18
V まとめ	23

挿 図 目 次

図1 吉良城周辺図	図7 トレンチセクション3
図2 土居周辺復元図	図8 タ 4
図3 調査区及びその周辺の地形図	図9 遺構平面図
図4 トレンチ設定図	図10 確検出状況及び遺構セクション
図5 トレンチセクション1	図11 遺物実測図1
図6 タ 2	図12 タ 2

図 版 目 次

PL. 1 調査前全景（西より）	PL. 13 Dトレンチ（北西より）
調査前全景（西より）	Eトレンチ（北東より）
PL. 2 調査前全景（南より）	PL. 14 Fトレンチ（東より）
調査前全景（北より）	Gトレンチ（東より）
PL. 3 調査前全状況（南東より）	PL. 15 Hトレンチ（北東より）
調査前状況（西より）	Hトレンチセクション
PL. 4 竹伐採風景（東より）	PL. 16 Iトレンチ（北より）
竹伐採風景（東より）	Jトレンチ（北西より）
PL. 5 調査区内残存石垣（南より）	PL. 17 Kトレンチ（北西より）
調査区内残存石垣（南東より）	Mトレンチ（北東より）
PL. 6 調査区内残存石垣（南より）	PL. 18 L・Nトレンチ（南より）
調査区内残存石垣（南西より）	Lトレンチ遺物出土状態
PL. 7 調査区（北より）	PL. 19 Lトレンチセクション
調査区（西より）	Lトレンチセクション
PL. 8 調査区（北西より）	PL. 20 Aトレンチ遺構検出状態（北より）
調査区（北東より）	Aトレンチ遺構検出状態（南より）
PL. 9 調査区全景（西より）	PL. 21 Aトレンチ遺構完掘状態（北より）
調査区全景（西より）	Aトレンチ遺構完掘状態（南より）
PL. 10 トレンチ全景（北西より）	PL. 22 SD-1（南より）
トレンチ全景（北東より）	SD-1遺物出土状態
PL. 11 トレンチ全景（南東より）	PL. 23 出土遺物1
トレンチ全景（東より）	PL. 24 出土遺物2
PL. 12 Aトレンチ（北東より）	PL. 25 出土遺物3
Cトレンチセクション	

I 調査にいたる経緯

吉良城跡の発掘調査は、詰及びその城下を含めた地域の保存管理について適切な資料を得るために実施するものであり、本年度の調査は、昭和59年度に実施した吉良城跡（詰）の発掘調査に引きつき、国・県の補助を受けて実施したものである。

調査区は、高知県吾川郡春野町弘岡上土居ノ谷1225～1233番地に所在し、吉良城跡西側の山麓の谷の入口に位置する。「土居ノ谷」のホノギが残存する部分であり、山下では重要な遺構の検出が期待される1つである。また、現状地形には石垣が各所に残存する。なお、調査区は、昭和40年に小島祐馬博士が復元された吉良の山下図では、三ノ堀に該当し、縁辺部に石垣、土壘あるいは櫛列等の検出が期待された。

近年高知県下でも、中世城跡の調査が活発に行われ、本年度は長宗我部国親・元親の本拠とされる岡豊城跡の発掘調査も実施された。これら中世城跡の発掘調査のほとんどは、「詰」を中心とした部分の調査であり「土居」の調査は、安芸市の五藤氏屋敷跡関係及び本調査の2カ所のみである。このことからも本調査が「土居」の実体解明の足がかりとなるものとみられる。土佐戦国の名城としても知られる吉良城を築いた吉良氏の土居の探究は必要なものである。

調査は、地権者の石田昭二郎・石田正俊両氏より承諾をいただき、高知県教育委員会の協力を得て、昭和60年9月27日から実施し、10月26日に発掘区の埋め戻し作業を終え、すべての調査を完了した。

註 「高知県人名辞典」では、「小島祐馬（1881～1966）支那学者。明治14年12月13日、吾川郡弘岡村（春野町）に生まれる。京大で支那学を学び、後京大文学部助教授となり、フランスに留学する。帰國後京大の文学部長をつとめる。昭和16年に定年退官、帰郷後は京大名誉教授、同24年に学士院会員となる。」とある。

II 土居と土居周辺の概要

1. 土居の位置

城跡の所在する丘陵の西側谷部に、「土居ノ谷」の小字名をもつ土地が存在する。春野町弘岡上土大谷の東側で、弘岡上土岡ノ段の北西側にあたり、地番では春野町弘岡上1225～1228・1231～1233番地周辺に該当する。地目は、田、畠、山林及び雑種地で、面積は約5,800m²を測る。土地の名称に「土居」の地名が残るところから、屋敷の所在地と考えられ、吉良氏邸跡と伝えられている。

『長宗我部地帳』によれば、「土居」と「土居」周辺については、以下のように記載されている。

開五旦カケテ

大谷川内 介衛門居

一・十五代 出武十八代
中屋敷

徳久 作衛門尉 納



図1 吉良城周辺図

岡屋敷	同	新左衛門作
一、武十五代 出式十毫代式分 下屋敷	和田 左兵衛 紿	
同所西ノ下	同	藤小居
一、武代 下屋敷	同	給
三ノ堀	同	九郎衛門居
一、十三代 出十九代式分 中屋敷	鍋島 八郎太夫 紿	
御土居外門ノ東ノ脇ホリタシ	同	御中間彦衛門抱
一、十六代五分勾 内三代式分地ふ	放 田	
三ノ堀六尺懸テ	大谷川内 本千屋文大夫分	
一、十四代 中屋敷	蒲原 弥十郎 抱	
	二郎三郎み	
御土居屋敷三尺懸テ	同	
一、三反武代 上屋敷	御 土 居	
御土居外門ノ西脇ホリタシ	同	谷木左衛門 紿
一、三代四分勾 下屋	放 田	
同所ノ西道ソエ	同	
一、武十代 堀	同 堀	
御土居ノ西	同	七郎兵衛居
一、四十毫代 出毫代三分 中屋敷	浜田 三郎衛門尉 紿	
	常吉居	
谷口	大谷川内 本千屋若狭分	
一、三十四代 中屋敷	道 標 紿	
	五郎口口	

このように、「土居」は「御土居」と呼称され、屋敷、外門、堀等が存在していたことがうかがわれる。しかし、「長宗我部地検帳」からは、土居屋敷とその付属施設についての概略を知ることはできるものの、城跡と土居との位置関係については明示されていないために、これを探知することは難しい。「土居ノ谷」において、「土居」が所在していたとするならば、その位置は城跡西側の山麓に位置づけられよう。^{註2}

2. 土居の現状

「土居ノ谷」は、老人ホーム「はるの荘」の北東にあたる谷部に位置しており、竹藪及び柿園となっている。土地は、谷地形としての自然景観を一部に残してはいるが、全体的に人為的な整形を受けており、四段からなる平坦な段状地形を呈している。この段状地形は、幅約40~50mを測るもので、谷奥部では山際を削平して形成されている。また、段状地形の境は、砂岩の割石を使用した石垣によって区画されている。

「土居ノ谷」からは、土師質土器片、備前焼檣鉢片及び近世陶磁器片を表面採集することができる。いずれも、現状地形の平坦面に散布しており、散布範囲は「土居ノ谷」一帯におよんでいる。遺物の散布状態は希薄であり、集中箇所を見出すことはできない。遺物の散布状況及び遺物の内容から、中世から近世にかけて広範囲に土地利用が行われたことが推測される。

「土居ノ谷」においては、壘状地形、石垣、堀跡及び墓地の存在が注意される。

壘状地形は、平坦な段状地形の周囲に認められるもので、幅約40~50cm、高さ20cm前後であり、上面は平坦である。段状地形と山際との間にみられ、全体的に馬蹄形状を呈する。この壘状地形は、谷地形を改変した際に形成されたものであり、平坦な段状地形を設けるために山際部分をカ

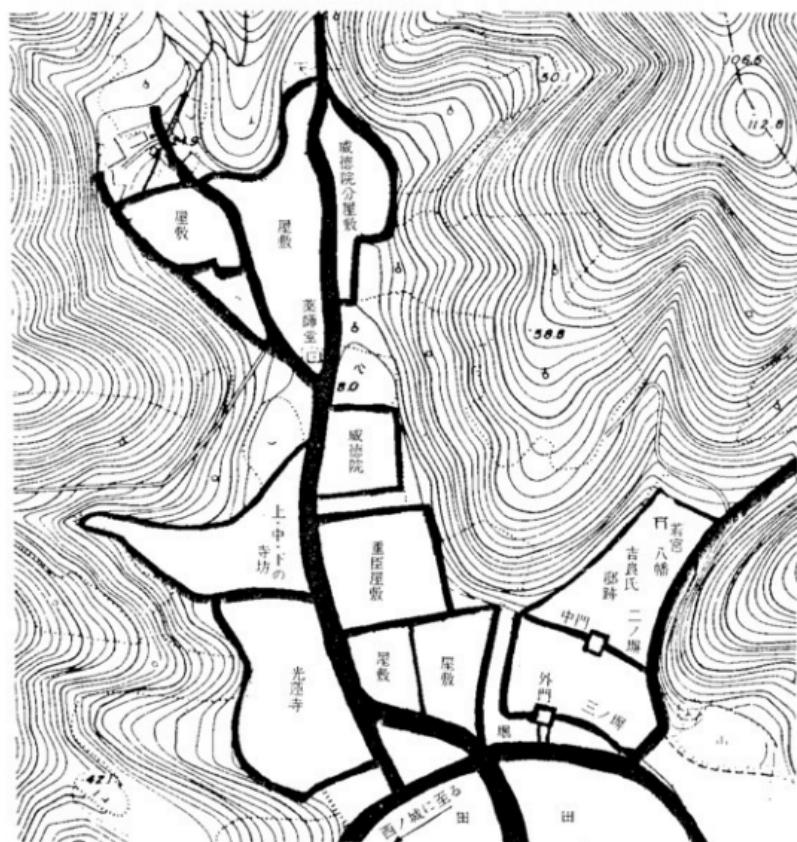


図2 土居周辺復元図

ットしたための結果であると判断される。

石垣については、段状地形の境として利用されているが、「土居ノ谷」の南側及び南西側において、特に顕著な石垣がみられる。この石垣は、砂岩の割石を野づら積みしたものである。割石は、拳大から人頭大の大きさである。石垣は、何回か積み直された痕跡をもつが、「土居ノ谷」の南西側では、当初からの石垣であると考えられる部分が遺存している。また、南側の石垣においては、排水施設であるとみられる石組みが、石垣のなかに組みこまれている。

堀跡は、「土居ノ谷」南側及び南西側の石垣に接してみられるもので、南西側の部分に明確な痕跡をとどめる。堀跡は、「土居ノ谷」の南側へも巡っていたことが現状地形から観察されるが、深さ、形状などについては不明である。

墓地は、「土居ノ谷」の北東で、谷部の最奥に所在している。五輪塔をもつ方形基壇が3基程現状で観察することが可能であり、現在若宮八幡宮の小社がおかかれている。

「土居ノ谷」における平坦な段状地形、壘状地形、石垣、堀跡及び墓地の存在は、「土居」の所在地であった可能性を示し、併せて地名・屋敷跡の付属施設と考えられる遺構の存在などから「土居」としての位置づけが一応考えられる。『長宗我部地検帳』に記載された「御土居」が、現状で観察される段状地形、堀跡として「御土居屋敷」、「ホリ」であった可能性もあるが、その一方、「土居ノ谷」においては遺物の散布は認められるが、礫石と考えられる遺構は確認されておらず、また現状で観察される屋敷跡の付属施設跡を「土居」に関連する遺構として判断するに足る確証が乏しいことも事実である。よって、「土居ノ谷」における発掘調査を通じて、より慎重に土居跡の確認作業を行っていくことが必要であると考える。

3. 土居周辺

「土居ノ谷」の西側に「大谷」の小字名をもつ土地が所在している。「大谷」は、土師質土器片、備前焼壺、播鉢片、近世陶磁器片が散布しており、また、壘状地形、石垣、段状地形が認められる。「大谷」は、薬師堂、天神宮の社が置かれている。

「大谷」は『長宗我部地検帳』の記載により、家臣団屋敷跡、光蓮寺跡、感徳院跡、上、中、下の寺坊の所在が推測されている場所である。また、現在みられる土地区画が、中世以降から継続的に使用されている可能性を有しており、発掘調査による確認作業を行うことによって、城跡と土居周辺との関連性についても、具体的に追求してゆくことが可能であると考えられる。

註1 「吉良城跡Ⅰ」 春野町教育委員会 1985.3

註2 「高知県春野町 中世の城跡」 春野町教育委員会 1985.3

III 調査の方法と経過

調査対象地は、大きく3段に分かれており、高い段から順にA、B、C地区と呼称した。調査区は竹藪であり、A地区が標高11.3~13.6m、B地区が標高10.8~11.6m、C地区が標高9.8~10.5mをそれぞれ測る。調査区の総面積は2,078m²であり、その内訳は、A地区が1,147m²、B地区が703m²、C地区が228m²である。

作業は、まず、竹の伐採作業から開始し、伐採作業の終了をまって、トレンチの設定を行った。トレンチは、磁北を基準線とした幅3mの任意のグリットに沿ってA地区に7ヵ所、B地区に6ヵ所、C地区に2ヵ所の計15ヵ所に設けた。グリットは0—0を原点として、北へN1、N2、N3……、南へS1、S2、S3……、東へE1、E2、E3……、西へW1、W2、W3……、と呼称した。なお、調査終了後も、発掘区を復元するために、調査区南側の道路に基準点(TP1・2)を設置した。この基準点の座標は、原点を(0, 0)とした時、TP1が(-20.226, 3.869)、TP2が(-7.869, -48.154)である。

発掘調査は、A・B・Cトレンチの順に実施し、土層の掘削は必要に応じて機械力を導入して行った。その結果、遺構が検出されたのはAトレンチのみであり、他のトレンチからは全く遺構は検出されず、土層観察に主眼をおいて調査した。遺構の検出されたAトレンチは拡張し、遺構の調査を行った。

調査期間は昭和60年9月27日から10月26日までの30日間であり、最終的な調査面積は372m²であった。

IV 調査の概要

1. 調査の内容

今次の発掘調査によって確認された遺構は、土壙1基、溝状遺構3条、ピット30個であった。これらの遺構は、Aトレンチ及びその拡張区において検出されたものである。また、Aトレンチ西部より、直径18cmと22cmの厚さ2cmで残存する焼土を2ヵ所検出した。これ以外に現状で残存する石垣の2ヵ所(G・Lトレンチ)でのたち割り調査を含めた縁辺部での調査では、吉良氏に関連するとみられる石垣、土壙、柵列等は確認できなかった。

(1) 層序

調査区は、場所によって堆積状態がかなり異なるが、一般的にみられる層序は以下の通りである。

第Ⅰ層 表土

第Ⅱ層 黄灰色粘質土層

第Ⅲ層 掘灰色粘質土層

第Ⅳ層 灰色粘質土層

第Ⅴ層 暗灰色粘質土層

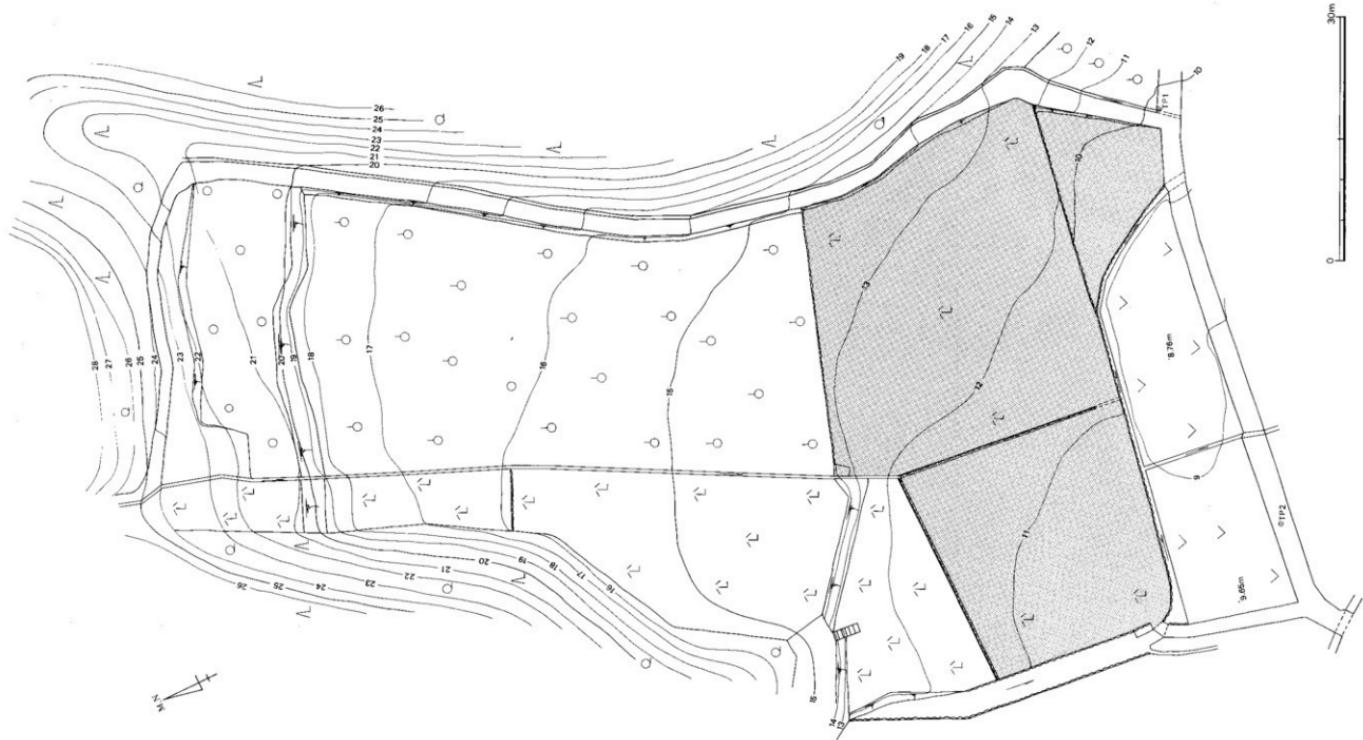


図3 調査区及びその周辺の地形図

これらの堆積層はすべて灰色を基調としており、人為的な整地層、堆積層と考えられ、純然たる遺物包含層は全く認められなかった。また、第Ⅱ層以下の土層中には若干礫が含まれていた。

(2) 各トレンチの概要

A トレンチ

A地区東端にL字状に設けた5グリット(3×15m)のトレンチであり、北壁、東壁、南壁に沿って0.8×3.0m、0.7×3.0m、0.6×6.0mのサブトレンチをそれぞれ付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～9層であり、この内、遺構が検出されたのは第2層上面であった。第1層表土は南面に向って傾斜しており、北東端と南西端との比高差は約0.4mである。第2層はトレンチの中央部でのみ検出され、北側では第4層、西側では第7層がそれぞれ下層にはいりこんでいた。のことから、第2層は、2次堆積層と考えられる。

遺物は、第1・4・7層から出土しているが、そのほとんどは、第1層からの出土である。

出土遺物には、土師質土器、青磁、染付、近世陶磁器(伊万里系、瀬戸・美濃系、能茶山焼等)があるが、その大半は細片で、図示できたのは、第1層から出土した土師質土器の杯(1)、青磁の碗(5)、染付の小杯(6)・碗(8)、能茶山焼の蓋(17)、第4層から出土した染付の皿(17)、第7層から出土した伊万里系の碗(12)、関西系の碗(20、21)であった。

B トレンチ

Aトレンチの西隣りに設けた1グリット(3×3m)のトレンチである。南壁に沿って0.6×3.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～7層であり、この内第4～7層は擾乱による堆積層とみられ、特に、第4層中からは拳大の礫が十数個検出された。

出土遺物には、土師質土器、青磁、染付、近世陶磁器(伊万里系、瀬戸・美濃系)があったが、すべて破片か細片であり、図示できたものはなかった。なお、これらはすべて第1層から出土している。

C トレンチ

A地区西侧、Bトレンチの西隣りに設けた3グリット(3×9m)のトレンチである。トレンチの南壁に沿って1.2×4.8mのサブトレンチを付設し、地表下1.8mまで掘削して土層観察を行ったが、遺構は検出されなかった。トレンチ内で認められた層位は第1～9層であり、この内第4層の赤褐色粘性砂礫土層はトレンチ西壁で認められた土層であり、第7層赤褐色粘質土層は第6層の下層で部分的に認められた。

遺物のほとんどは第1層からの出土であり、土師質土器、備前、青磁、白磁、染付、近世陶磁器(伊万里系、能茶山焼等)約30点であるが、大半が細片であり、図示できたのは、第1層から出土した土師質土器の杯(2)、青磁の碗(4)、染付の皿(10)であった。



図4 テレントチ設置図

Dトレンチ

B地区東端に設けた1.5グリット（3×4.5m）のトレンチであり、南壁に沿って0.7×3.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～6層であり、この内、第4層は厚さ5cm前後で堆積していた炭化物層である。

遺物は、第1層から土師質土器と近世陶磁器（瀬戸・美濃系、能茶山焼）約20点が出土しているが、ほとんどが細片で図示できたのは、瀬戸・美濃系の蓋（14）と能茶山焼の碗（15）の2点のみであった。

Eトレンチ

Dトレンチの西へ2グリット離して設けた1グリッド（3×3m）のトレンチであり、南壁に沿って0.7×3.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～6層であり、Dトレンチの層位とほぼ同じであった。ただし、Dトレンチで認められた炭化物層は全く検出されず、新たに第3層赤褐色砂性粘質土層を検出した。

遺物は、第1層から土師質土器、染付、近世陶磁器（産地不明）約10点が出土しているがすべて細片であるため図示できたものはなかった。

Fトレンチ

B地区南東端部に設けた2グリット（3×6m）のトレンチであり、西壁に沿って0.6×3.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～8層である。この内、第3・4層は南端部のみで認められた層であり、石垣が約2.5m南にあることから、石垣造築の際の2次堆積層であると考えられる。また、第6層褐色砂質土層と第7層灰褐色粘質土層はトレンチの北側においてのみ認められた堆積層である。

出土遺物は少なく、第1層から青磁と近世陶磁器（産地不明）の細片が数点出土しているが、図示できるものはなかった。

Gトレンチ

B地区南西部に設けた2グリット（3×6m）のトレンチであり、西壁に沿って0.7×3.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～12層である。この内、第4層黄色砂礫土層と第5層灰黄色砂性粘質土層は、南端部のみで認められた層であり、Fトレンチで認めた第3・4層同様に石垣造築の際の2次堆積層であると考えられる。また、第5層直下から厚さ3cm前後で堆積する炭化物層を検出した。

出土遺物はFトレンチ同様少なく、第1層から土師質土器、備前、近世陶磁器（産地不明）が数点出土したのみで、図示できたのは備前の擂鉢（3）1点であった。

Hトレンチ

B地区北西端部で鍵状に設けた約4グリット（3×12m）のトレンチであり、東壁に沿って、0.5×3.0m、南壁に沿って1.0×6.0mのサブトレンチを付設した。この部分は、丁度西側の石垣が崩れており、たち割り調査を行うことができた。トレンチ内で認めた層位は第1～12層である。この内第5層灰色砂礫土層は、堆積状態からして2次堆積とみられ、この層にのっている第4層灰黄色粘質土層、第6層灰褐色粘質土層、第7層暗灰色粘質土層も2次堆積層であると考えられる。また、第8～12層もその堆積状態からして、2次堆積層とみられる。

遺物は、第1層から土師質土器、近世陶磁器（伊万里系、能茶山焼）10点余り出土しているが、すべて細片であるため図示できたものはなかった。

Iトレンチ

B地区北東端部に設けた1グリット（3×3m）のトレンチであり、南壁、西壁に沿って、0.7×2.3m、0.7×3.0mのサブトレンチをそれぞれ付設した。トレンチ内で認めた層位は第1～3層であり、他のトレンチのような攪乱は認められなかった。

遺物は、第1層から土師質土器、染付、近世陶磁器（能茶山焼、产地不明）が10点出土しており、この内、図示できたのは产地不明の鉢（22）1点であった。

Jトレンチ

A地区北部に設けた約5グリット（3×15m）のトレンチであり、西壁、南壁に沿って、0.6×7.0m、0.7×3.0mのサブトレンチをそれぞれ付設した。トレンチ内で認めた層位は第1～9層であり、第2層中に比較的大きな石が数個混入していた。第4層黄褐色砂質土層は、第3層灰色粘質土層直上に厚さ5cm前後で堆積した層で、第6層黄褐色砂礫土層は第3層中に間層として一部堆積していた。また、第5層灰色砂礫土層はトレンチ北側でのみ検出した堆積土層である。

遺物は第1層から土師質土器、備前、常滑、青磁、染付、近世陶磁器（产地不明）等が約30点余り出土しており、この内、図示できたのは染付の皿（9）1点であった。なお、出土遺物の大半は土師質土器であった。

Kトレンチ

A地区南西端部に設けた約2.6グリット（3×8m）のトレンチであり、東壁に沿って1.0×5.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認めた層位は第1～9層であり、この内、第2層の灰色砂礫土層は、堆積状態からして2次堆積層であると考えられる。また、この堆積は、トレンチの大部分で認められた。

遺物は、第1層から近世陶磁器片（唐津系、产地不明）が3点出土したのみで図示できるものはなかった。

Lトレンチ

Kトレンチの東側、A地区南端部に設けた約3グリット（3×9m）のトレンチであり、東壁に沿って0.9×9.0mのサブトレンチを付設した。この部分は、丁度南側の石垣が壊されており、たち割りの調査を行うことができた。トレンチ内で認めた層位は第1～14層であり、各所で2次堆積とみられる灰色ないしは黄色の砂礫土層を検出した。石垣を構成している石は大半が10～15cm大の小さなもので、石垣最下部の根石とみられる石でも20cm大のものあり、裏込も石垣の石が比較的小さなものであるため小規模であった。また、石垣の裏側からは、新たな石垣は確認できなかった。

遺物は、第1層から土師質土器、近世陶磁器（産地不明）が8点出土し、また、第8層から近世陶磁器（瀬戸・美濃系、産地不明）2点が出土しており、この内図示できたのは第8層から出土した瀬戸・美濃系の小杯（13）と産地不明の碗（19）の2点であった。

Mトレンチ

Lトレンチの東側、A地区の南東端でL字状に設けた4グリット（3×12m）のトレンチであり、東壁沿いに0.8×6.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～10層であり、Lトレンチ同様各所に2次堆積とみられる砂礫土層を検出した。特に、トレンチ北側では土層の堆積が不規則であった。

遺物は、第1層から染付片、土師質の鍋、近世陶磁器片（産地不明）が5点出土しており、この内、土師質の鍋（11）1点が図示できた。

Nトレンチ

C地区西部、Lトレンチの1グリット南に設けた1グリット（3×3m）のトレンチであり、東壁に沿って0.5×3.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は第1～4層であり、他のトレンチのような攪乱は認められなかった。

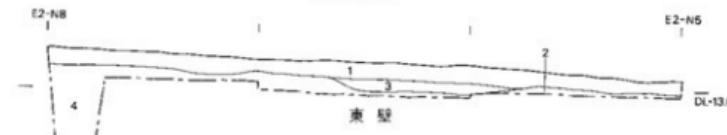
遺物は少なく、第1層から土師質土器片が2点出土したのみであり、図示できたものはなかった。

Oトレンチ

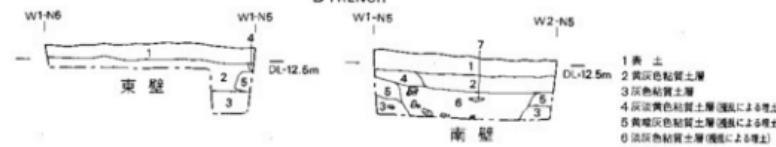
C地区東部、Mトレンチの1グリット南に設けた1グリット（3×3m）のトレンチであり、西壁に沿って0.5×3.0mのサブトレンチを付設した。トレンチ内で認められた層位は基本的にはNトレンチと全く同じであったが、トレンチ西側で不規則に堆積する砂礫土層（第4～6層）を検出した。これら第4～6層は堆積状態からして2次堆積層と考えられる。

遺物は、第1層から土師質土器片4点、染付1点、近世陶磁器（産地不明）1点が出土したのみで、図示できたものはなかった。

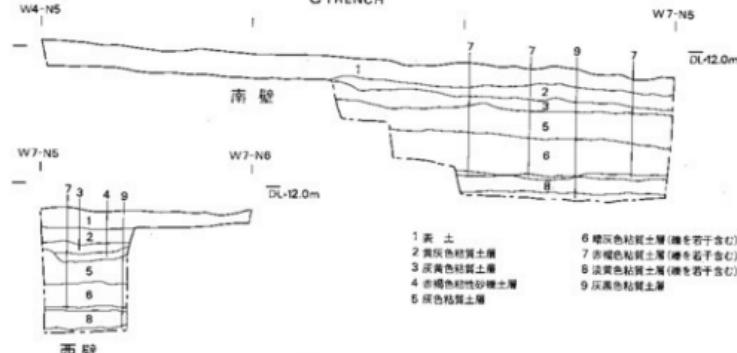
A TRENCH



B TRENCH



C TRENCH



D TRENCH

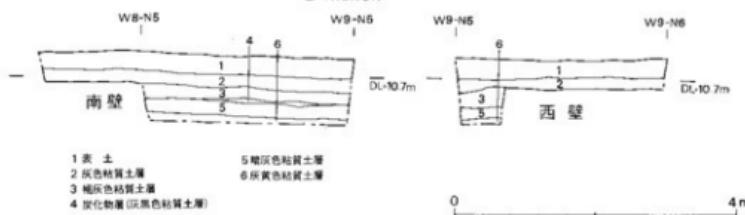


図5 トレンチセクション1

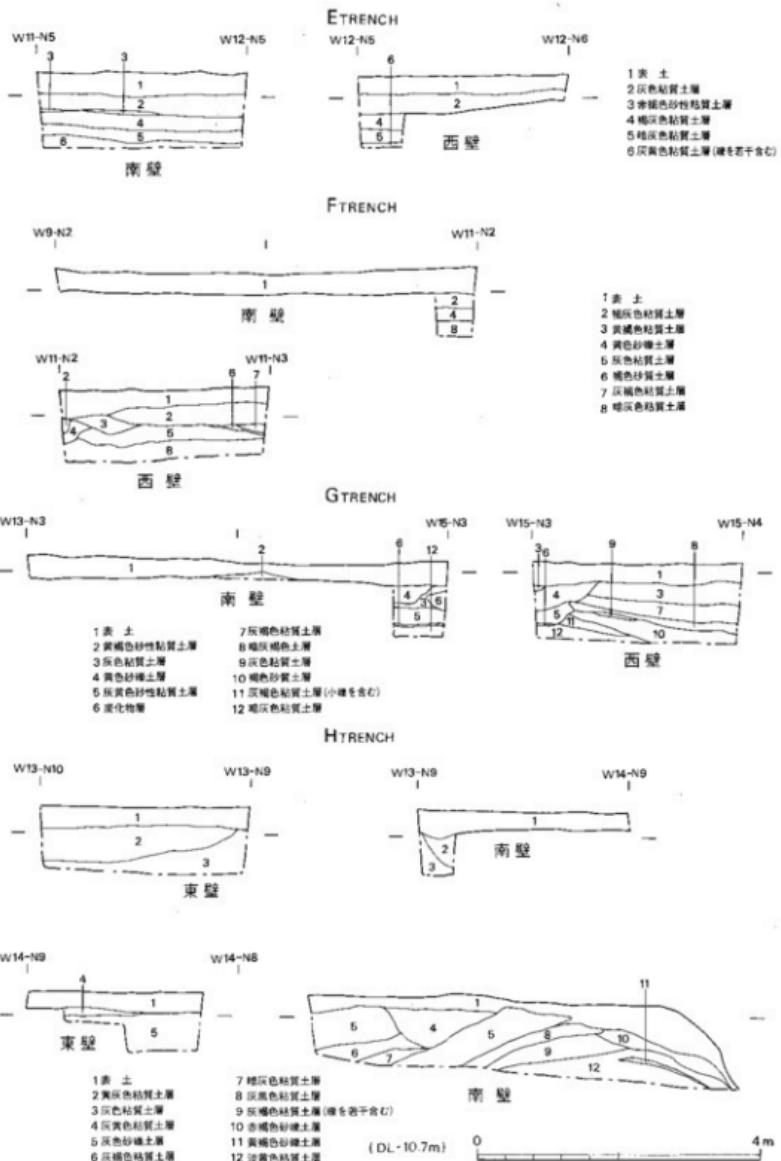


図 6 トレンチセクション2

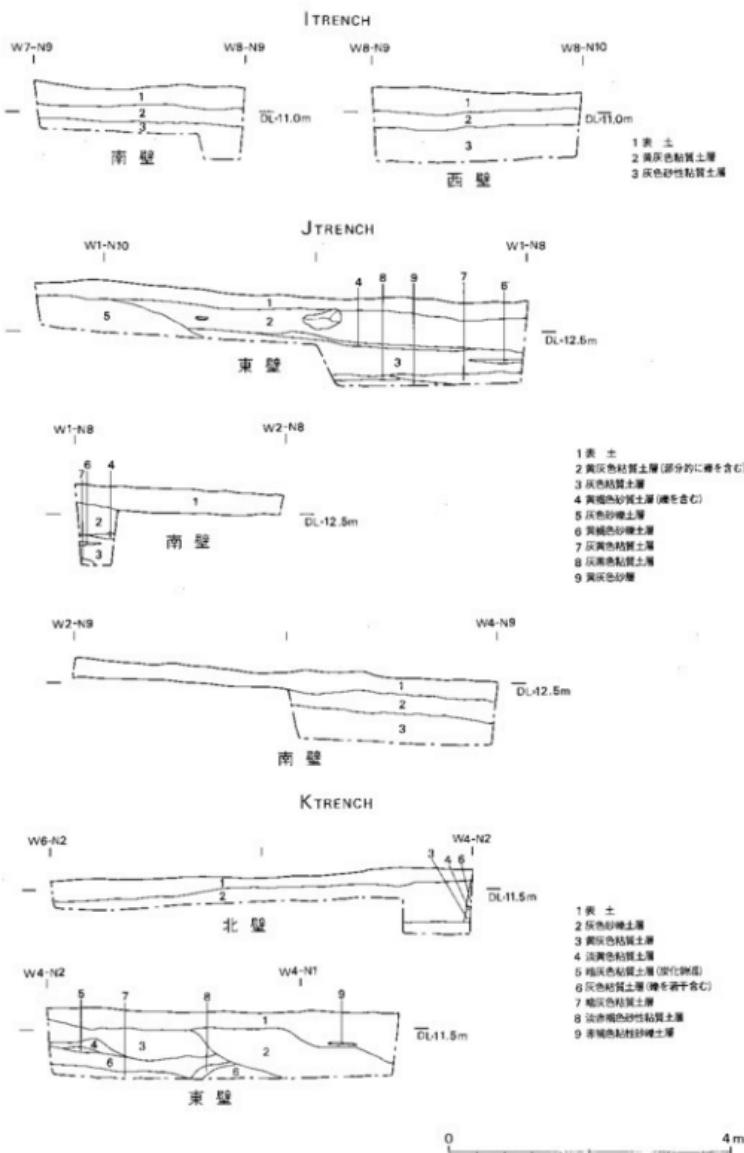


図7 トレンチセクション3

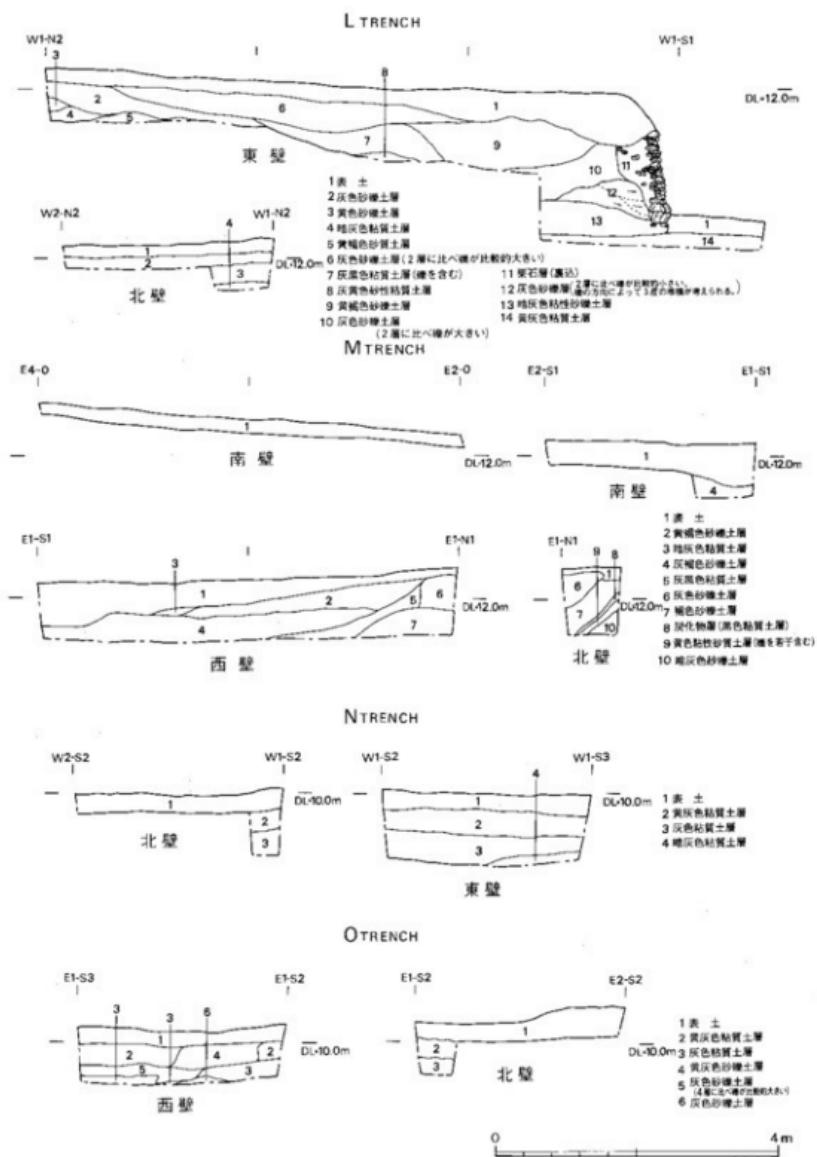


図8 トレンチセクション4

2. 検出遺構

土 壤

SK-1

Aトレンチ中央部西寄りに位置し、第1層を掘り下げた段階で検出した。遺構は第2層を掘削していた。遺存状態は、東側が壁高12cm前後と比較的良好であったのに対し、西側が壁高2cm前後と不良であった。

平面形は、不整形を呈し、長径5.20m、短径1.70m、深さ2~18cmを測る。長軸方向はN-4°-Eである。断面形は逆台形状をなし、壁は底面より比較的緩やかに上がる。底面は、西側へ傾斜し、北部では1段高い平場を有し、南端部では南に幅0.25mの細い溝が延びている。また、底面には短い溝状の掘り込みが2ヵ所、ピットが5個掘り込まれていた。ピットの内、東壁沿いで検出した長径1.00m、短径0.70m、深さ18mのピットは、断面形が擂鉢状をなす。埋土は、黄灰色粘質土單一層であり、南壁で一辺20cm大の石を1個検出した。遺物は、須恵器1点、土師質土器8点、染付1点、近世陶磁器（瀬戸・美濃系）2点が出土しているが、すべて細片であり、図示できたものはなかった。

溝状遺構

SD-1

Aトレンチほぼ中央部に位置し、第1層を掘り下げた段階で検出した。遺構は、第2層を掘削しており、南部でSD-2に切られている。また、3ヵ所でピットに掘り込まれていた。

溝は、南北に延びており、幅0.3~1.1m、深さ2~10cmを測り、残存長約9.0mである。断面形は舟底形を呈し、壁は底面より内湾気味に上がっている。基本面は、北端から南端へ比高差約42cmで傾斜している。また、底面には3個の小ピットが掘り込まれていた。埋土は、暗灰色粘質土單一層であった。遺物は少なく、土師質土器の細片6点と近世陶磁器（能茶山焼）が1点出土したのみであり、図示できたのは能茶山焼の皿（16）1点であった。

SD-2

Aトレンチ拡張区南部に位置し、第1層を掘り下げた段階で検出した。遺構は、第2層を掘削している。南側でピット1個が掘り込まれていた。

溝は、南北に延びており、幅0.8~1.2m、深さ4~30cmを測り、残存長約3.5mである。断面形はU字形を呈し、壁は底面より内湾して上がっている。基底面は南から順に4段の平場を有する。埋土は黄暗灰色粘質土單一層であった。遺物は少なく、土師質土器の細片が4点出土したのみであった。

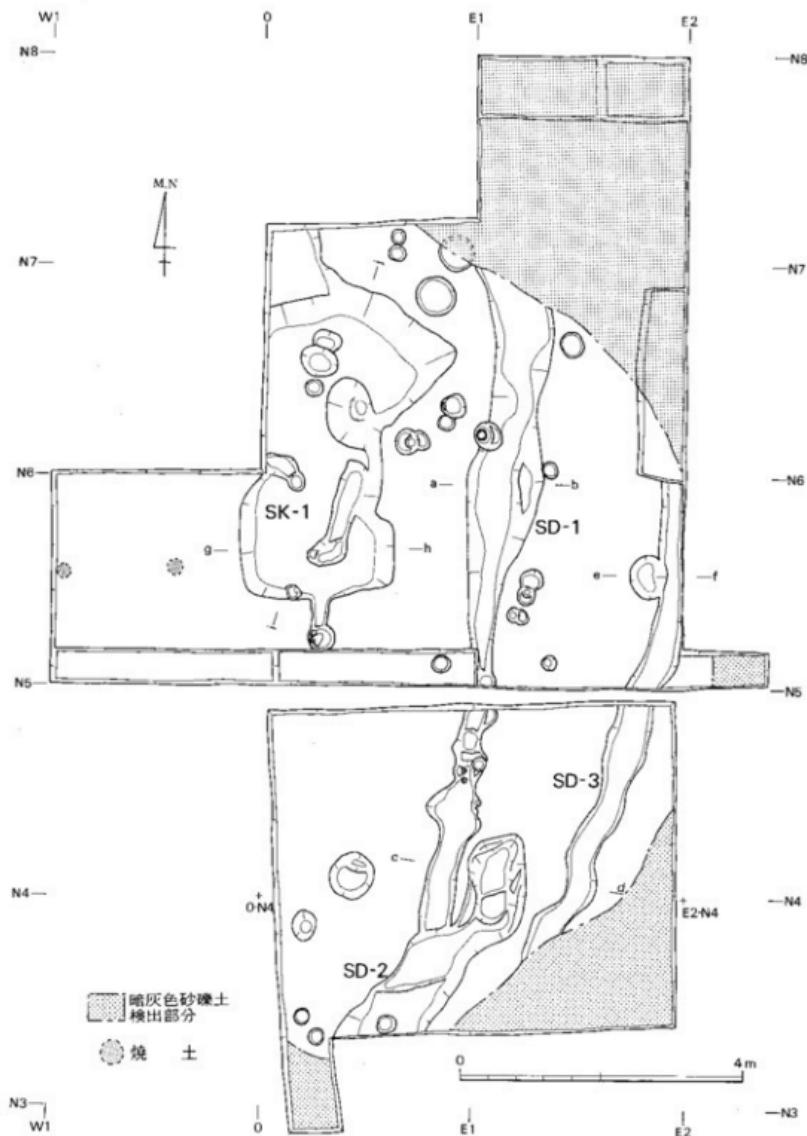


図9 遺構平面図

Aトレンチ東端部に位置し、第1層を掘り下げた段階で検出した。遺構は第2層を掘削しており、北側でピット1個を切っている。

溝は、南北に延びており、幅0.3~0.5m、深さ4~18cmを測り、残存長約7.0mである。断面形はU字形を呈し、壁は底面より内湾して上がっている。基底面は、北端から南端へ比高差約45cmで傾斜している。埋土は、黄暗灰色粘質土單一層であった。遺物は少なく、染付1点、青磁1点、近世陶磁器（産地不明）3点が出土したのみで、図示できたのは、産地不明の碗（18）1点であった。

ピット

30個のピットを検出した。これらの大半は、直径10~30cm、深さ10~30cmを測る柱穴とみられるピットであり、3個のピットより柱痕を確認した。これらはAトレンチ及びその拡張区の北部に集中しており、明確な建物址は復元できなかったが、1×1間程度の小規模な建物（小屋等）が存在していたのではないかと考えられる。埋土は、ほとんど暗灰色粘質土であった。遺物は、ほとんど出土せず、3個のピットより、土師質土器片、染付片、近世陶磁器片が数点出土したのみであり、図示できるものはなかった。

3. 出土遺物

出土遺物の内、土師質土器が最も多く、次に近世陶磁器、他に少量の青磁、染付、中世陶器（備前、常滑）等があった。これらの大半は細片であり、復元できたのは以下に記した22点である。近世陶磁器の内、19世紀以降のものは、産地の同定が難しく、不明確なものは、産地不明として記した。

(1) 土師質土器

杯（図11-1、2）

1、2ともほぼ同じ形態を呈する。口縁部は欠損し、体部は上外方へのび、底部は平らである。底径は、1が5.0cm、2が5.6cmである。1、2とも器面は著しく摩耗し、調整は不明である。胎土には赤色粒子を含み、焼成はやや不良である。色調は1、2とも内外両面がにぼい橙色を呈する。

(2) 備 前

擂鉢（図11-3）

口縁部の破片であり、口径は27.0cmである。体部は上外方へのび、口縁部でやや直立し、端部両端を拡張する。内面には6本単位の条線が残存する。内外面ともロクロナデ調整を施す。胎土

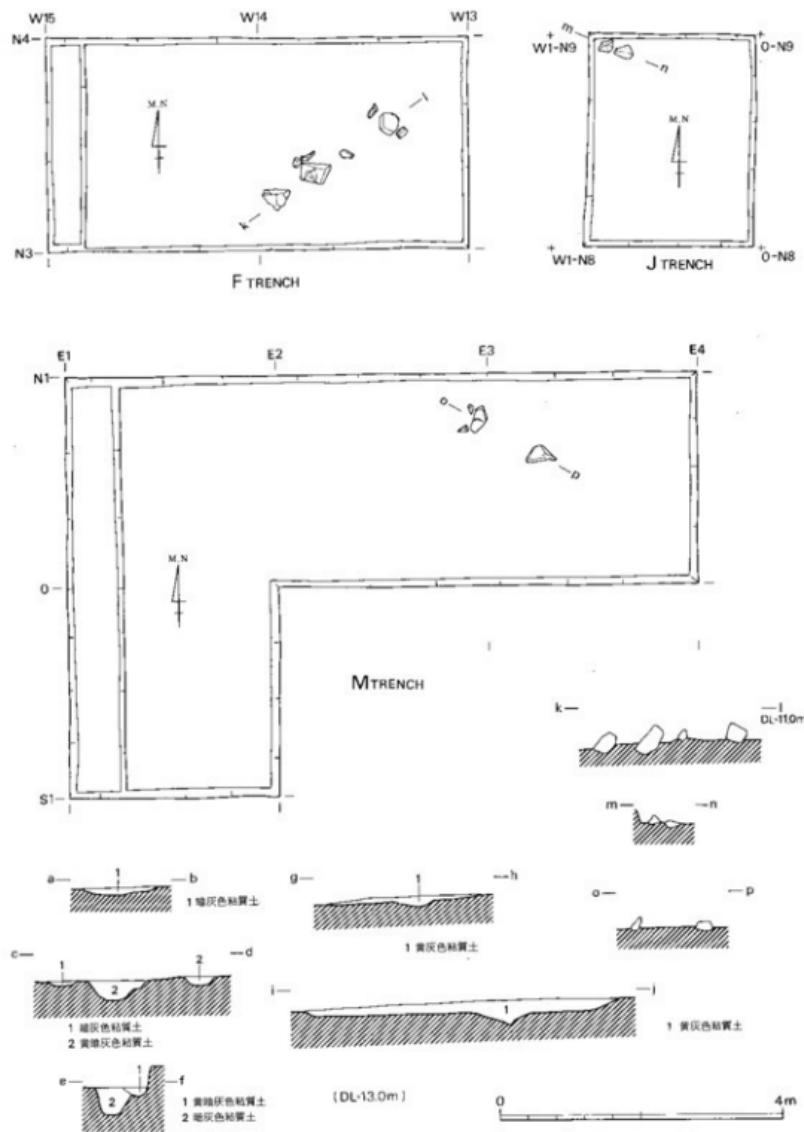


図10 磁検出状況及び遺構セクション

には0.5mm大の砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。

(3) 青 磁

碗 (図11-4、5)

4、5とも細蓮弁文の碗である。4は、口縁部の破片であり、口縁部はやや内湾気味に上がり、端部を細く仕上げる。外面にはヘラ描の細蓮弁文が施され、内外面に貫入がある。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には青緑釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。5は、底部の破片で、体部は内湾気味に上がり、底部は平らで、高台は削り出しによる。外面にはヘラ描の細蓮弁文が施され、内外面に貫入がある。外底は釉ハギを行っている。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には淡青緑釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。

(4) 染 付

小杯 (図11-6)

底部の破片である。底部はやや丸味があり、高台は削り出し高台である。見込、外面及び外底に文様が施される。骨付は釉ハギが行われる。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。

皿 (図11-7~10)

7は口縁部の細片であり、口縁部は外反し、端部は丸く仕上げられる。外面に界線と文様、内面に界線がそれぞれ施される。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。8は口縁部から底部まで残存するが、約半分は欠損している。体部はやや内湾気味に上がり、口縁部で外反し、端部を細く仕上げる。底部はほぼ平らで、高台は削り出し高台である。見込に2重の界線と文様、口縁内面には1重の界線、外面には界線をはさんで牡丹唐草文をそれぞれ施す。骨付は釉ハギが行われている。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。9は底部の破片である。体部は、平らな底部より緩やかに上がっている。高台は削り出し高台である。見込には2重の界線にはさまれた文様、高台外面には1重の界線がそれぞれ施される。疊付は釉ハギが行われている。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。10は口縁部の細片である。上外方にのびる体部から口縁部は短く外反し、端部を細く仕上げる。口縁内面に2重の界線、外面に2重の界線と文様がそれぞれ施される。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。

(5) 土 師 質

鍋 (図11-11)

近世の土師質の鍋で、口縁部の一部が残存する。口縁部は緩やかに上がり、端部を丸く仕上げ

る。内外面にはロクロナデ調整が施され、外面には煤が付着する。胎土には1~3mm大の砂粒が多く含まれる。焼成は良好で、内面はにぶい橙色、外面は褐灰色を呈する。

(6) 伊万里系

碗 (図11-12)

半磁器の碗であり、口縁部は欠損している。底部はほぼ平らで、体部は内湾して上がる。疊付は釉ハギが行われている。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面とも淡青緑色を呈し、胎土は灰色を呈する。

(7) 濑戸・美濃系

小杯 (図11-13)

磁器の小杯で、体部から口縁部にかけての破片である。体部は内湾気味に上がり、口縁部で上方を向き、端部を細く仕上げる。口縁外面に1条の稜を作り出している。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉を施釉し、磁胎は白色を呈する。

蓋 (図11-14)

磁器の蓋で、つまみは欠損している。天井部はほぼ水平にのび、内面にはかえりが貼付されている。天井部外面には透明釉を施釉する。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉を施釉し、磁胎は灰白色を呈する。

(8) 能茶山焼

皿 (図11-15、16)

15、16ともほぼ同形態である。体部は平らな底部から緩やかに内湾して短く上がり、端部を細く仕上げる。見込と口縁部内面には界線と文様が施されている。また、見込は蛇ノ目状に釉ハギが行われている。疊付も釉ハギが行われている。15は16に比べ底径が小さい。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面とも透明釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。

蓋 (図11-17)

天井部はほぼ平らで、つまみが削り出される。口縁部は緩やかにカーブして下る。口縁部外面と天井部内面に文様が施される。つまみ端部は釉ハギが行われる。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉が施釉され、磁胎は灰白色を呈する。

(9) 他の近世陶磁器

碗 (図11-18、図12-19~21)

18、19は磁器で、20、21は陶器であり、後者は、一般に関西系と言われるものである。18は、口縁部が欠損する。体部は平らな底部よりやや内湾して上がる。高台は削り出し高台である。口

縁外面には文様が施される。呪付は釉ハギが行われている。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉が施釉され、磁胎は灰色を呈する。19は、口縁部から底部にかけての破片である。体部は上外方へのび、口縁部でやや外反し、端部を細く仕上げる。底部は平らで、高台は削り出しによる。呪付は釉ハギが行われている。口縁外面に草花文、口縁内面、見込にも文様がそれぞれ施される。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には透明釉を施釉し、磁胎は白色を呈する。20は、体部から底部にかけての破片で、体部は平らな底部から内湾して上がっている。高台は削り出しによる。見込には目跡が残る。呪付は釉ハギが行われている。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には黄緑色釉を施釉し、胎土は浅黄色を呈する。21も体部から底部にかけての破片で、体部は平らな底部から内湾して上がっている。高台は削り出しによる。見込には目跡が残る。呪付は釉ハギが行われている。胎土は精良で、焼成は良好である。内外面には黄緑色釉が施釉され、胎土は黄白色を呈する。

鉢 (図11-22)

口縁部の小破片である。体部は上外方へ上がり、口縁部でほぼ水平にのび、端部は面をなす。体部内面から外面にかけて鉄釉が施釉される。胎土は精良で、焼成は良好である。施釉された部分は暗褐色、他はにぶい黄橙色を呈する。

V ま と め

今次の発掘調査は、吉良城跡の土居跡と推測される土地を対象地としたものである。中世城跡に関連する土居跡の発掘調査例は全国的にみても少なく、また、吉良城跡の土居跡に関しては、これまで古文書の現存資料に基づく研究が主として行われてきたこともあり、調査の成果が期待されていた。

今次の調査の成果をまとめると、以下のとおりである。

各所に残存する石垣については、H・Lトレンチの2ヵ所でたち割り調査を行った。Hトレンチでは、石垣が崩れていたため、裏込等石垣に関連するものは検出されなかった。土層の断面観察では多数の2次堆積層を確認したのみであり、石垣の構築の時期については明確にできなかつたが、表土と類似する灰色を呈する堆積層が2次堆積層にみられたことから、比較的新しい時期に手が加わったものではなかろうか。Lトレンチでは、第8層中より出土した瀬戸・美濃系の小杯(13)と産地不明の碗(19)が19世紀のものであることから、石垣を築いたのは少なくとも19世紀以降とすることができる。A地区とB地区との境をなす石垣は、たち割り調査を実施できなかつたが、Cトレンチで石垣との距離が約0.7mの所まで調査することができた。トレンチの西壁の断面観察からは、裏込等石垣に関連するものは確認できず、石垣の構築に際して大きな手が加わったものとは考えられなかつた。また、石垣は、調査区の境をなす石垣との間に長さ約3.0mの暗渠が設けられている。この暗渠は、A地区とB地区の境をなす石垣と一連のものとみられることや、Lトレンチの調査結果を考えると調査区南側の境をなす石垣も比較的新しい時期のものと推察される。

調査区に残存する石垣について記したが、これはあくまでも、調査した石垣についてのみ確認したことである。まだ、各所に残存する石垣については、未調査でもあり、その構築時期については即断できず、今後の調査を待たねばならない。

今次の調査で遺構が検出されたのは、Aトレンチ及びその拡張区においてのみである。確認した遺構はその範囲も狭く、広範囲に及ぶものではなかつた。遺構が検出されたのは第2層上面のみであり、同一レベルにある他の層からは全く検出できなかつた。また、第2層の分布が半円形を呈しており、何らかの手が加わったのではないかと考えられる。これは、第7層が第2層の下にはいりこんでいることからも首肯でき、第2層は、自然堆積層ではなく、人為的な2次堆積層、であろう。検出された遺構の時期は、第7層中から出土した伊万里系の碗(12)、関西系の碗(20, 21)が18世紀後半から19世紀にかけてのものであることから、ほぼ同時期かそれ以降のものとすることが可能である。また、検出遺構の中で、重複関係から比較的古いものとみられるSD-1から出土した能茶山焼の皿(16)が18世紀後半から19世紀のものであることからも、検出された遺構はすべて、18世紀後半ないし19世紀以降のものであると考えられる。このことから遺構は、吉良氏とは直接関係するものではないと判断される。

各トレンチの堆積層の状態からは、純然たる遺物包含層が全く存在せず、各所に攪乱等による

とみられる2次堆積層を確認したのみである。他の層位でも、灰色を基調とする耕作土的な土層が大半で、土層の境が不明確な所もあった。また、Dトレンチでは炭化物層を検出した。これらの土層の状態は畑作等が長時間にわたって行われた結果ではなかろうか。ただ、その時期等について、遺物が出土せず、明らかにできなかった。調査区縁辺部では、各所で灰色を基調とする砂礫土層を確認した。この砂礫土層は、場所により堆積の状況は異なるが、Jトレンチ北部、K～Mトレンチではかなりの量で堆積しており、表土直下から深い所では地表下2m以上も堆積が続いている所もある。この砂礫土層の堆積状態は、地山の砂礫土層とは考えられず、2次堆積によるものとみなければならぬであろう。北方にある吉良ヶ峰にセメントの採石場ができて以降山からの流水はほとんどなくなったが、採石場ができる以前は、大雨の時にはかなりの量の流水があったとのことである。このことから、谷の流水等による堆積層とも考えられる。各トレンチの状態からも調査区の性格について考えてみたが、吉良氏に関連するとみられる生活面は確認することはできなかった。

以上、今次の調査では吉良氏に直接関連する遺構及び生活面は確認できなかったが、出土遺物の中には、土師質土器（1、2）、青磁（4、5）、染付（6～10）のように、16世紀に比定できる遺物も比較的多く含まれており、周辺部には吉良氏に関連する遺構が残存している可能性もある。このことから今後も年次をおった調査が必要であろう。

最後に『長宗我部地検帳』に記載されている「御土居」周辺の土地の面積についてみてみたい。
三ノ堀は六旦懸テ十四代あり、出が十五代三分である。これは、三ノ堀が約306m²で、出が約335m²であったことを示す。御土居屋敷は三旦懸テ三反式代で上屋敷となっている。これは、御土居屋敷の上屋敷が約3,324m²あったことを意味する。御土居外門ノ西脇は、三代四分が畠であり、約74m²が畠となったことを示す。同所の西道ソエには式十代の堀になっている。これは、約437m²の堀があったことを示す。御土居の西は四十老代で、出が老代三分ある。これは、上屋敷の西側は約896m²で、出が約28m²であったことを意味する。これらの面積と土居ノ谷の現在の面積を比較してみると、土居屋敷の上屋敷は約3,324m²であり、吉良氏邸跡とされる今次調査区北側の面積が約3,400m²であることから、地検帳の記載とはほぼ一致する。ただし、三ノ堀といわれる本調査区及びB地区北側の部分の面積は約2,407m²であり、地検帳からみる三ノ堀の面積は約641m²で、約6分の1たらずである。以上、地検帳からみるかぎり、土居屋敷自体は面積的にはほぼ一致するが、付属する施設が現状とはあまりにも異なる。これが如何なる結果なのかは今後の研究課題である。

註1 『長宗我部地検帳』舟川郡、なお、文献は第Ⅱ章中に記載してある。

註2 『長宗我部地検帳の研究』横川末吉 1961年 よりれば『地検帳』の検地竿は太閤検地と同じ六尺三寸竿であった。よって、ここでは1間の長さを1.909mとし、面積は小数点以下を四捨五入した。

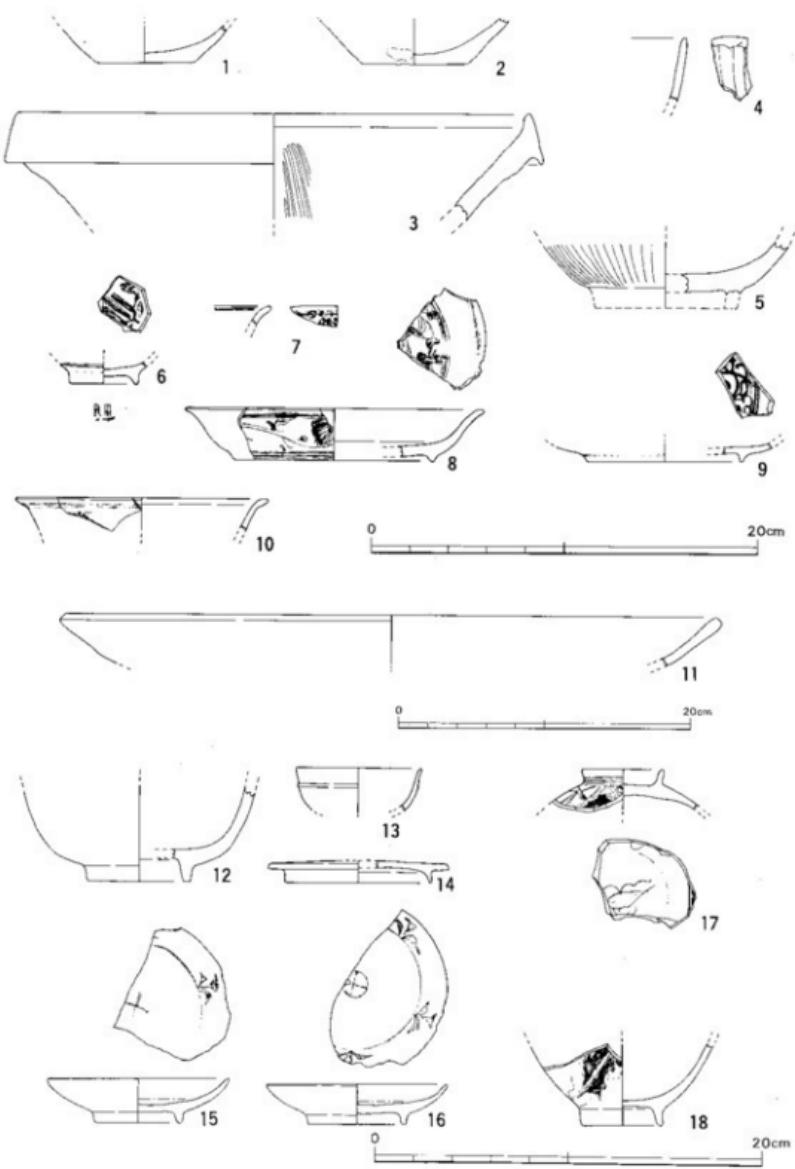


図11 遺物実測図 1

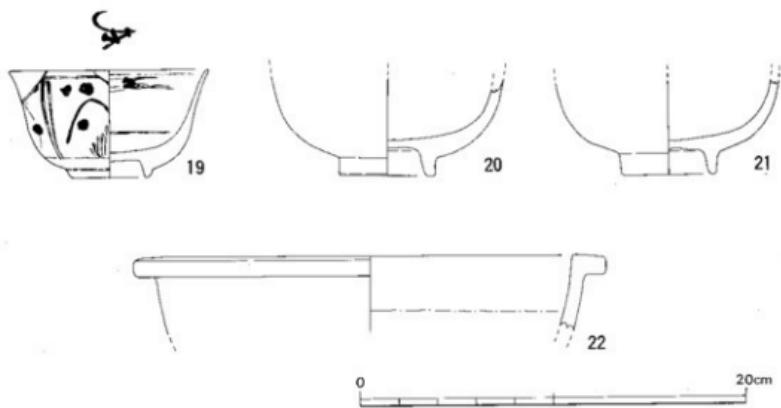


図12 遺物実測図 2

図版



調査前全景（西より）



調査前全景（西より）

PL. 2



調査前全景（南より）



調査前全景（北より）



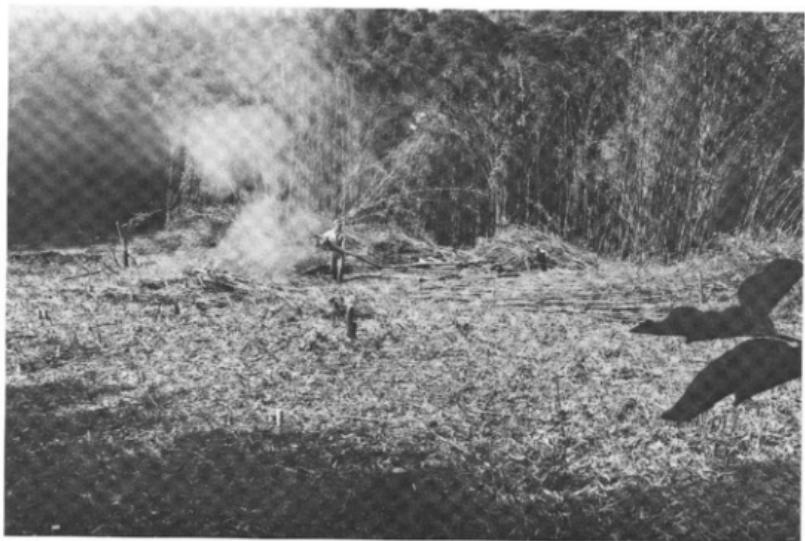
調査前状況（南東より）



調査前状況（西より）



竹伐採風景（東より）



竹伐採風景（東より）

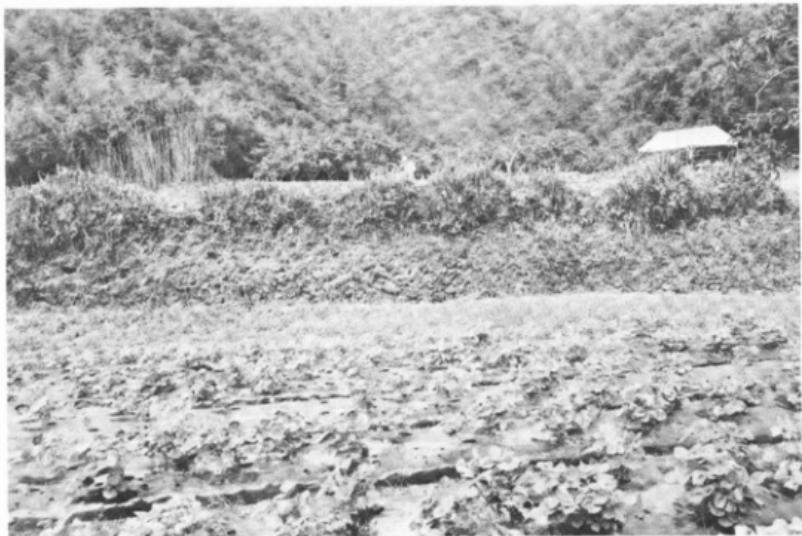


調査区内残存石垣（南より）



調査区内残存石垣（南東より）

PL. 6



調査区内残存石垣（南より）



調査区内残存石垣（南西より）



調査区(北より)



調査区(西より)



調査区(北西より)



調査区(北東より)



調査区全景（西より）



調査区全景（西より）

PL. 10



トレンチ全景（北西より）



トレンチ全景（北東より）



トレンチ全景（南東より）

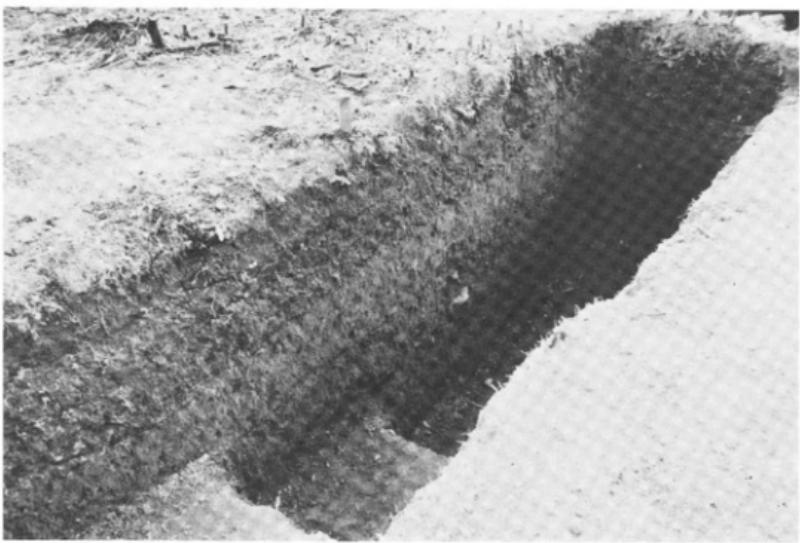


トレンチ全景（東より）

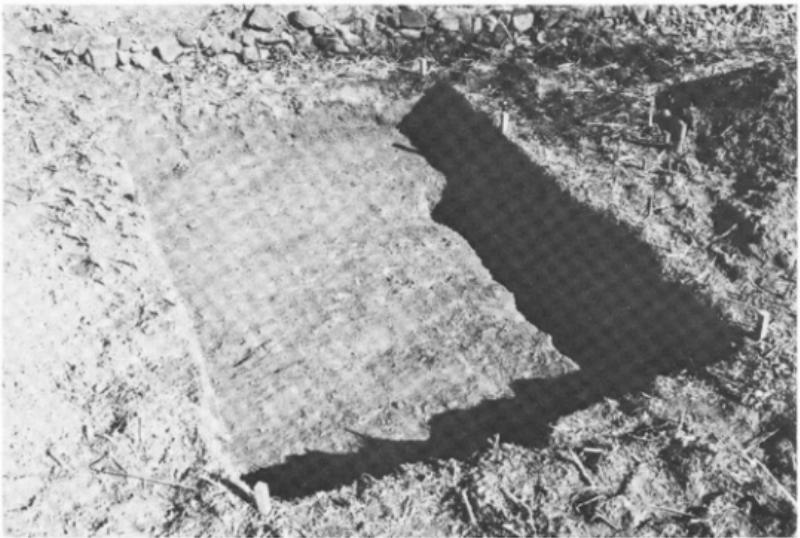
PL. 12



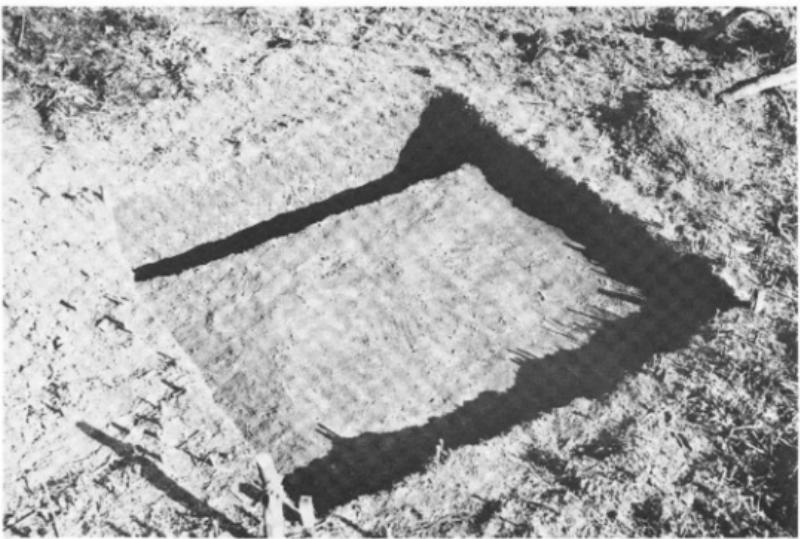
A トレンチ (北東より)



C トレンチセクション

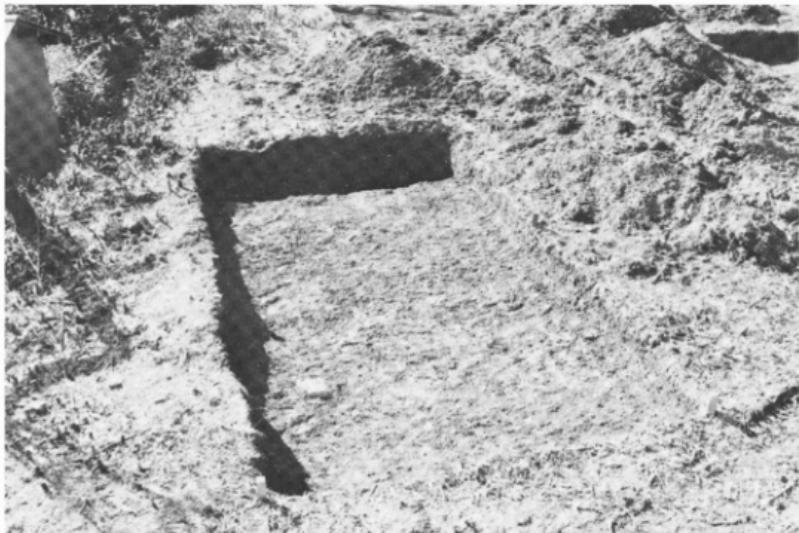


D トレンチ (北西より)



E トレンチ (北東より)

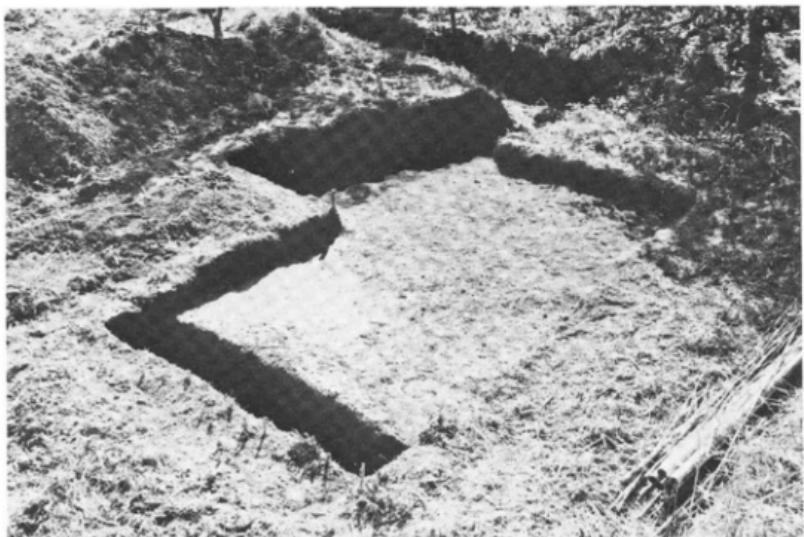
PL. 14



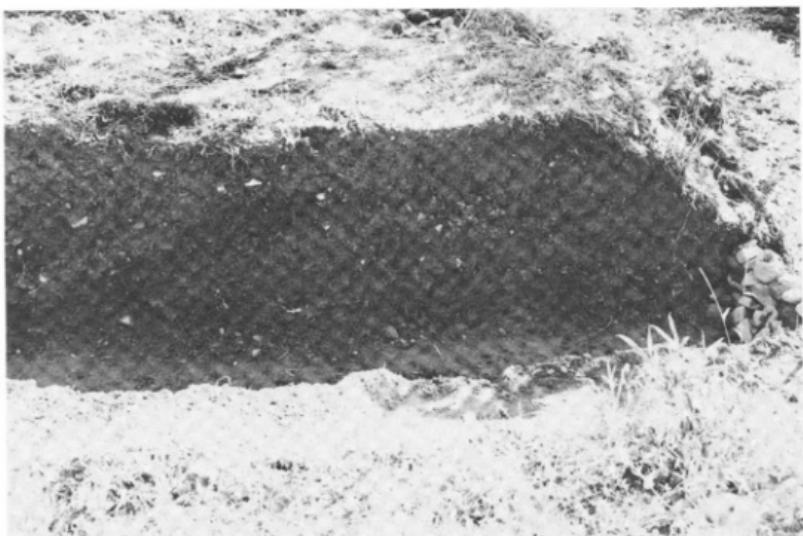
F トレンチ (東より)



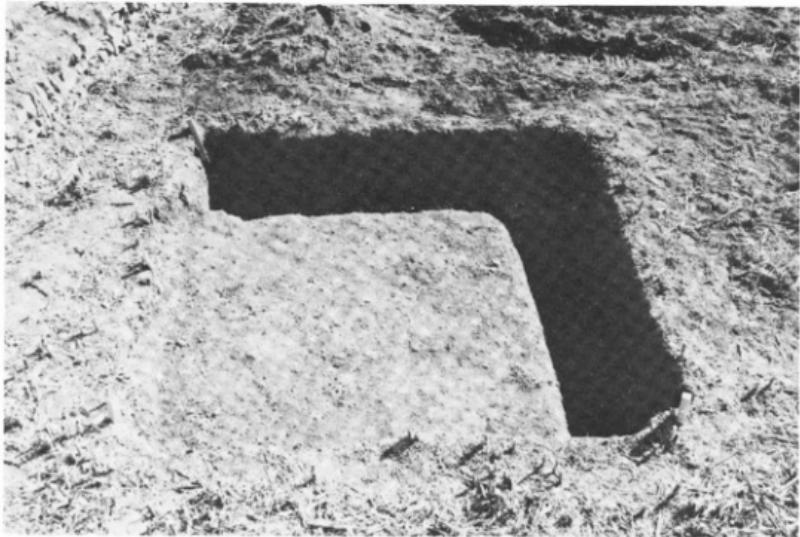
G トレンチ (東より)



H トレンチ (北東より)



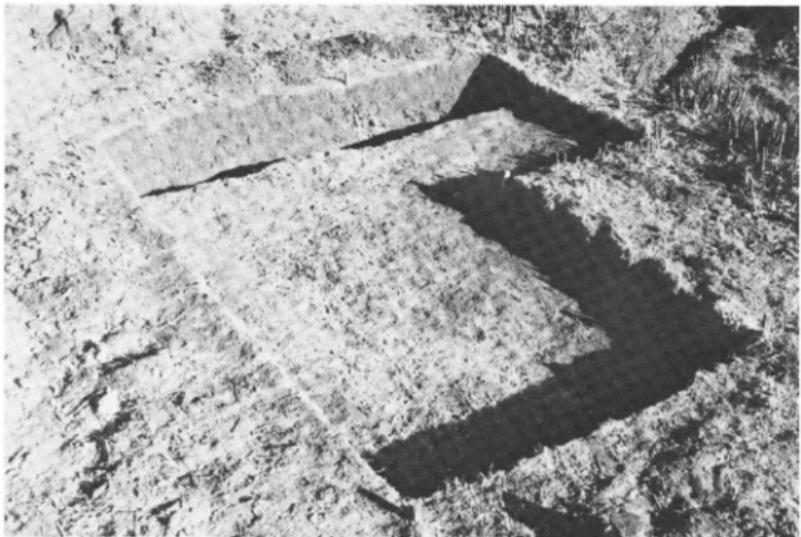
H トレンチセクション



I トレンチ (北より)



J トレンチ (北西より)



Kトレンチ (北西より)

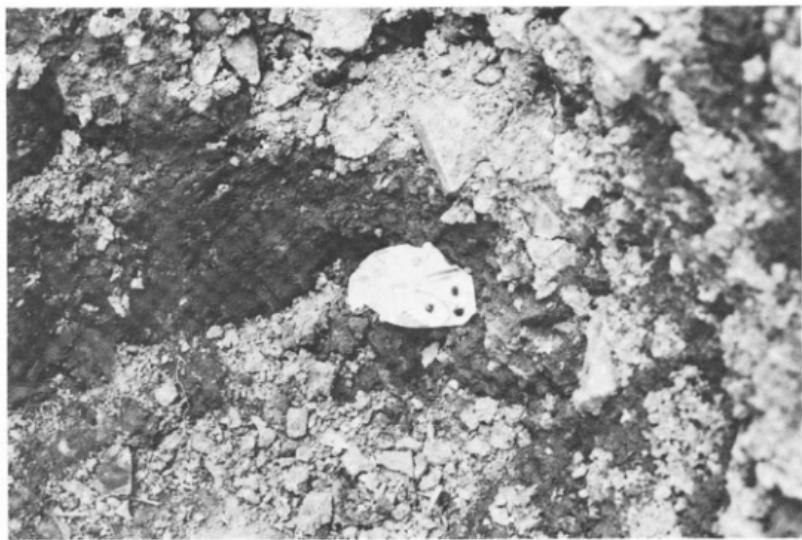


Mトレンチ (北東より)

PL. 18



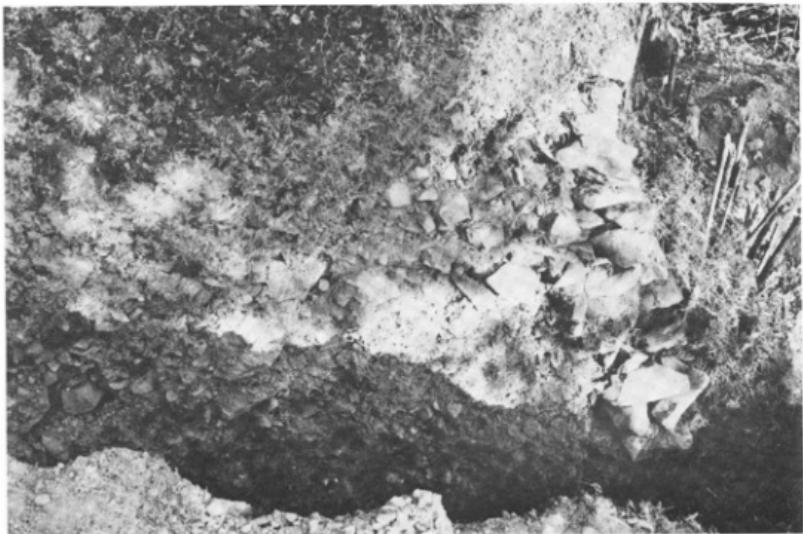
L・N トレンチ (南より)



L トレンチ遺物出土状態



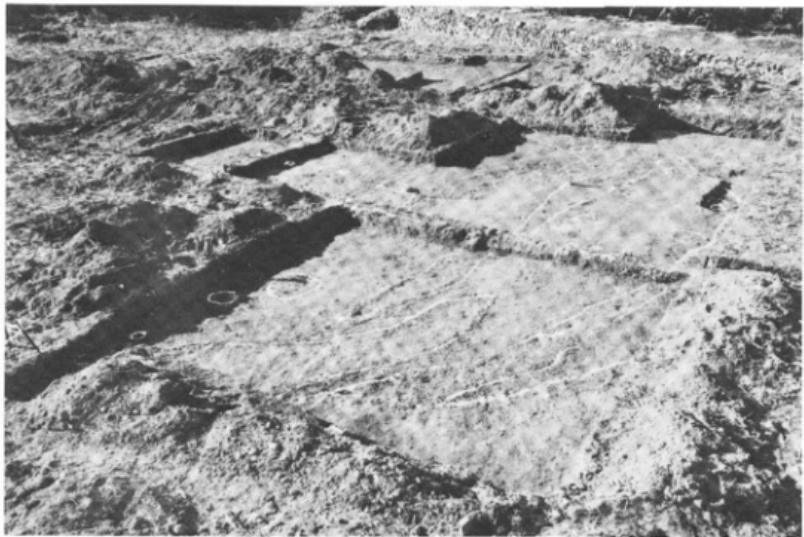
L トレンチセクション



L トレンチセクション



A トレンチ遺構検出状態 (北より)



A トレンチ遺構検出状態 (南より)